

## 事業概要

認知症当事者とご家族を対象とした対話型アート鑑賞プログラム「ARTRIP／アートリップ」を全国の美術館で普及するため、全国実態調査と公募によりアートリップと講演会を実施、また継続実施するための課題をすべての実施館と情報共有することで、更なる普及への端緒とネットワーク構築を目的とするものです。

### The Project Outline

In order to spread or popularize the art project “Art x Museum x Dementia” ARTRIP between ‘dementia person’ and patient families to museums nationwide, we will conduct ARTRIP and lectures to collect nationwide surveys and public feedback, share continuously with participating museums current topics on conducting this project.



一般社団法人 Arts Alive

2024年3月

# 美術館における認知症当事者を対象とした

A Report of

## 社会的処方アートプログラムの開催

“Art x Museum x Dementia” Project of art appreciation program, ARTRIP.

## 「アート×美術館×認知症」

for people with ‘dementia and family members at art museums

## 報告書

in Japan as a means of Social Prescription

## 2023(令和5)年度／日本財団助成事業

supported by THE NIPPON FOUNDATION 2023

「アート×美術館×認知症」

報告書

2023(令和5)年度／日本財団助成事業

“Art x Museum x Dementia” Project of art appreciation program, ARTRIP,

for people with ‘dementia and family members at art museums in Japan as a means of Social Prescription supported by THE NIPPON FOUNDATION 2023

P03

はじめに

P18

振り返り会／概要

P04—05

事業概要

P19—P21

振り返り会／各館発表

P06—07

全国の美術館への  
アンケート調査結果

P22—P25

振り返り会／意見交換

P08—17

各館実施一覧

P26

講演会に参加された方の感想

P30

おわりに



一般社団法人 Arts Alive  
2024年3月

美術館における認知症当事者を対象とした社会的处方アートプログラムの開催  
「アート×美術館×認知症」  
報告書  
2023(令和5)年度／日本財団助成事業

A Report of  
“Art x Museum x Dementia” Project of art appreciation program, ARTRIP,  
for people with ‘dementia and family members at art museums in Japan as a means  
of Social Prescription supported by THE NIPPON FOUNDATION 2023

|                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| P03                   | P18                  |
| はじめに                  | 振り返り会／概要             |
| P04—05                | P19—P21              |
| 事業概要                  | 振り返り会／各館発表           |
| P06—07                | P22—P25              |
| 全国の美術館への<br>アンケート調査結果 | 振り返り会／意見交換           |
| P08—17                | P26<br>講演会に参加された方の感想 |
| 各館実施一覧                | P30<br>おわりに          |

## はじめに

一般社団法人 Arts Alive は2023年11月から2024年3月にかけて、「美術館における認知症当事者を対象とした社会的処方アートプログラムの開催」(日本財団助成)として小樽から熊本までの10館の美術館にて初めての認知症の方とご家族の為の《アートリップ:アートの旅》と一般向けの講演会を実施しました。この冊子は県立美術館から、教育普及担当の学芸員もいない小規模の美術館更に、民間運営の美術館までコレクション内容も地域性も異なる美術館での実施記録です。チラシの作成から認知症関連機関を通した参加者募集まで通常業務に加えて実現のために各館の学芸員が奔走してくれました。

実施した全ての館で一枚目は緊張していた方も含めアートリップは沢山の笑顔がありました。アンケートでは参加されたご家族の全ての方が「また、参加したい」と答え、亡くなつたご主人に言及された認知症のお母さまに感動されたお嬢様、昔から絵がお好きだという認知症の旦那様の終わった後の絵画における表現の変遷を語られたご主人に感銘を受けた奥様、また、「かまくら」や「まつたけ」の絵を見て楽しそうに昔話をされた方々、それぞれが作品を安心して1時間のプログラムの最後まで楽しんでくれました。

超高齢社会で85歳以上の二人に一人が認知症である日本中の美術館が認知症の方や家族にとっての安心してアートの旅が一緒に楽しめる、そんな旅が社会的処方としてだれもが享受できるそんな社会をゴールにしています。

本冊子の10館の試みの記録を見て、自館でもアートリップをやりたい、と思う美術館が一つでも増えればこれ以上の喜びはありません。

一般社団法人 Arts Alive

代表理事 林容子

*aa*  
*arts alive*



### ● ARTRIP／アートリップについて

アートをグループでじっくりと見て、それぞれの感想を自由に話し、日常生活とは異なる対話を通して楽しむ鑑賞プログラム「ARTRIP／アートリップ」は、2006年に認知症当事者とご家族を対象にした対話型鑑賞プログラムを開始したMoMA（ニューヨーク近代美術館）の協力で、一般社団法人 Arts Alive が日本の高齢者の現状に合わせて開発、2012年より美術館で開始、全国の美術館、高齢者施設、病院、学校、企業研修などで展開しています。



# 全国の美術館への アンケート調査結果

## ◎全国の美術館へのアンケート調査結果

「美術館における認知症当事者を対象とした社会的処方アートプログラムの開催」についてのアンケート結果は、認知症当事者を対象としたプログラムについて、有効回答の46%以上の館が検討したいものの、予算不足、担当者不在、人員不足、認知症の方へのアプローチがわからない現状が明らかになりました。

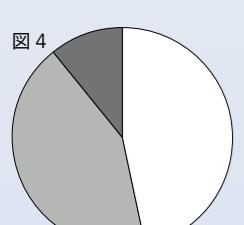
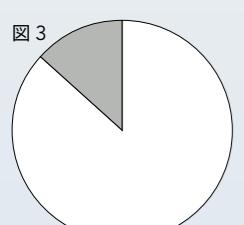
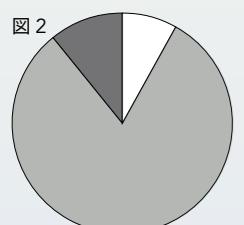
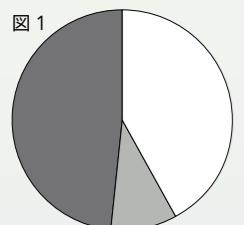
- 回答館数・回答率／150館・36.43%
- 実施希望館／13館（有効回答の8.6%）
- 将来的に実施希望の館／57館（有効回答の37.7%）

## アンケートの内容

- 認知症当事者と介護者対象のプログラムに 관심はありますか？
- 貴館では、認知症を含む高齢者向けのプログラムを実施したことはありますか？
- 高齢者向けプログラム実施館に対して／定期的に実施、不定期に実施のどちらですか？
- 高齢者向けプログラムを実施したことのない館に対して／実施出来ない理由は何ですか？

## ◎認知症当事者と介護者対象のプログラムに 관심の有無（図1）

- ある／42.2%
- ない／9.5%
- どちらともいえない／48.3%



## ◎認知症を含む高齢者向けのプログラムの実施の有無（図2）

- ある／8.1%
- ない／81.2%
- 認知症当事者はないが、一般高齢者はある／10.7%

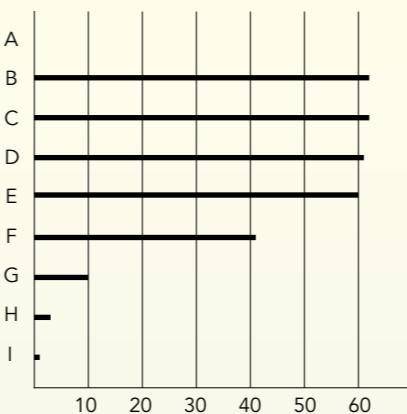
## ◎開催している館の開催／定期開催・不定期開催（図3）

- 不定期開催／86.7%
- 定期開催／13.3%

## ◎開催していない館／今後の実施希望の有無（図4）

- 検討したい／46.7%
- ない／42.6%
- ある／10.7%

図5



## ◎開催希望がない館の理由（図5）

### 複数回答

- A：興味がない／0
- B：予算がない／62（49.6%）
- C：担当者がいない／62（49.6%）
- D：やり方がわからない／61（48.8%）
- E：認知症当事者の参加へのアプローチがわからない／60（48%）
- F：時間がない／41（32.8%）
- G：人員不足／10（8%）
- H：常設展・収蔵品がない／3（2.4%）

### I：その他の理由

- 参加対象を絞ったプログラムがない／1（0.8%）
- そもそも検討したことがない／1（0.8%）
- 大学附属の美術館であるため／1（0.8%）
- 開館したばかりで実施できない／1（0.8%）
- 現時点での優先順位は高齢者でないため／1（0.8%）
- 小規模館のため／1（0.8%）
- 特に意識して取り組んでいない／1（0.8%）
- 上司の理解がない／1（0.8%）
- 検討の機会がなかった／1（0.8%）
- 安易に実施できないと思うから／1（0.8%）





## 秋田県立近代美術館

Akita Museum of Modern Art

秋田県横手市赤坂字富ヶ沢 62-46

<https://common3.pref.akita.lg.jp/kinbi/>

担当学芸員／学芸主事 北島珠水

2024年2月25日(日)

アートリップ／13:30～14:30

参加者数／9名（当事者4名と介護者5名）見学者12名

講演会／14:45～15:30 参加者数／23名

## アートリップでの鑑賞作品

「残照」酒井三良／1923(大正12)年／絹本着色／136.0×112.0cm

「かまくら」勝平得之／1995(昭和30)年／木版 39.5×140.0cm

「地の華—凍結した夜」佐々木裕久／1972(昭和47)年

紙本着色／120.0×165.0cm

※所蔵は全て秋田県立近代美術館

## アートリップ参加者アンケートなど

次回の参加希望は 80%

## 感想・ご意見

- おもしろかった。入居している人は、いつも同じ景色しか見ていないので、こういう機会があれば嬉しいと思う。
- 1回も参加したことのない人にも参加してもらって、どんなふうに感じたか聞いてみたい。
- 近代美術館にピッタリだと思う。
- 「地の華」に感動した。抽象画の良さを改めて感じて、自分でも描いてみたいと思った。この企画のおかげで興味を持つことができた。人の感想を聞いて、様々な感じ方を知った。
- すべての絵がすばらしく感動した。すっと見していく美術館の見学の仕方もあるのでしょうが、今日みたいに、これまでの人生を思い出しながら、五感を踏まえての見方も良かったです。
- 普段は睡眠時に途中覚醒があるが、アートリップの後は朝までぐっすりであった。
- 出歩くことが少ないため、筋肉痛になったが、とても楽しかった。
- 秋田県の地域課題に迫る取組であった。近代美術館のみならず、他の施設でも取り組んでいけるような展開を図ってほしい。

## 熊本市現代美術館

Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本県熊本市中央区上通町2番3号

<https://www.camk.jp/>

担当学芸員／岩崎美千子

2024年3月2日(土)

アートリップ／10:30～11:30 参加者数／5名、うち見学者3名

(親が認知症のため参考に見学、うち1名は新聞記者のリサーチも兼ねて)

講演会／13:30～15:00 参加者数／17名

## アートリップでの鑑賞作品

「夏みかん」石田澄男／2007(平成19)年／油彩・キャンヴァス／45.5×53.0cm

「楽しい生活」淵田安子／2000(平成12)年／油彩・パネル・キャンヴァス／

130.3×162.1cm

「花」坂本善三／1933(平成5)年／油彩・キャンヴァス／91.0×72.8cm

※所蔵は全て熊本市現代美術館



《夏みかん》石田澄男



《楽しい生活》淵田安子



《花》坂本善三

熊本日日新聞 2024(令和6)年3月27日に記事掲載

## アートリップ参加者アンケートなど

次回の参加希望は 100%

## 感想・ご意見

- 普段は、亡くなった父のことは、殆ど話題に上がらないんですが、絵を見ながら、父の話をしたので、びっくりしました。母と美術館に来るなど考えられなかったので、とてもよい機会になりました。ありがとうございました。
- 母が認知症に近い状態にあり、今後どのように付き合って良いか不安に思っていたところに、今回のイベントを知り参加しました。今後、母の病状がよかうなったら一緒に美術館に来てみたいと思いました。
- 参加者のみなさんのいろんなご意見を聞きながら鑑賞できて楽しかったです。ありがとうございました。
- 個人での参加でしたが、高齢者の方が、絵に昔の記憶を呼びさまされる様子に感動しました。母は今寝たきりですが、元気なうちに、こんなふうに一緒に絵を見たかったです。

## 佐倉市立美術館

Sakura City Museum of Art

千葉県佐倉市新町 210

<https://www.city.sakura.lg.jp/section/museum/>

担当学芸員／西川可奈子

2024年3月9日(土)

アートリップ 10:00～11:00 参加者数／7名(当事者3名とご家族4名)

講演会／14:00～15:30 参加者数／42名

## アートリップでの鑑賞作品

「房総の晴」 櫻井慶治／2004(平成16)年

「桜華雲 - 神楽による」 佐藤事／1978(昭和53)年

「揺れる」 小川イチ／1988(昭和63)年

※所蔵は全て佐倉市立美術館

## アートリップ参加者アンケート

次回の参加希望は 85%

## 感想・ご意見

- ・ゆっくり見るといろいろわかる事が有って楽しいと思いました。
- ・1人ではなかなか行きづらいので、お声掛けしてくれると嬉しいです。
- ・目が悪いのでボケた目で見てた。
- ・とても楽しかった。
- ・1つの作品を皆で言い合う機会は全くなかったのでおもしろかったです。
- ・参加してよかったです。今後も機会があれば参加したい。
- ・もう少しみんなが積極的に発言されたらいいのになあとおもいました。
- ・誘導されている感じがしました。でも全く違う方達と1つの作品を話すことは新鮮でした。
- ・主人が認知症のため、包括支援センターの方にお説明を受け、絵が好きだった主人にとっても良い影響と思いました。今日の主人の変化が楽しみです。

## 丹波市立植野記念美術館

Tamba City Ueno Memorial Museum of Art

兵庫県丹波市氷上町西中 615-4

[https://www.city.tamba.lg.jp/kanko\\_bunka/tamba\\_shisetsu/bijutsukan/](https://www.city.tamba.lg.jp/kanko_bunka/tamba_shisetsu/bijutsukan/)

担当学芸員／永山宗史

2024年3月15日(金)

アートリップ／11:00～12:00 参加者数／8名(当事者1名とご家族1名、6名)

講演会／13:00～14:30 参加者数／14名

## アートリップでの鑑賞作品

「松茸」 山本茂斗萌／制作年不詳／紙本着色／36.0×31.2cm／三友楼所蔵

「鷹図」 常岡文龜／制作年不詳／絹本着色／50.5×124.0cm／丹波市立植野記念美術館所蔵

「春の海 一の谷から淡路を望む」 川端謹次／1972(昭和47)年

油彩・カンヴァス／111.5×145.0cm／三友楼所蔵



《松茸》 山本茂斗萌



《鷹図》 常岡文龜



《春の海 一の谷から淡路を望む》 川端謹次

メディア取材／サンテレビ、朝日新聞社、毎日新聞社、神戸新聞  
サンテレビにてアートリップが放映（同日夕方のニュース）

## アートリップ参加者アンケートの感想

次回の参加希望は 100%

## 感想・ご意見

- ・ステキな絵を見ながらお話しをしていただき、楽しくてとても良かったです。
- ・絵の見方が先生のお話し、みな様のお話しを聞き、感動した事がたくさんあり、高齢になり絵画を見てゆっくりとした時間をつくりたいと思っています。
- ・とても良かった。
- ・絵画の見方がこれまでとは変わりました。みなさんと交流することで、いろんな感じ方、目のつけ所が違うことに、ハッとさせられました。そして、自分の幼少期の記憶が呼び覚まされ、懐かしく心が動き、良い時間を過ごさせていただきました。楽しかったです、ありがとうございました。
- ・ゆっくりと鑑賞でき、この上なく幸せな気持ちになりました。ありがとうございました!!
- ・母と一緒に参加しました。絵も人と話すのも好きな母なので、楽しめたと思って参加しました。母の積極的に楽しめている様子を見て私も嬉しく思いました。
- ・とても心豊かにホッコリとさせていただきました。ありがとうございました。

感想・ご意見

・ゆっくり見るといろいろわかる事が有って楽しいと思いました。

・1人ではなかなか行きづらいので、お声掛けしてくれると嬉しいです。

・目が悪いのでボケた目で見てた。

・とても楽しかった。

・1つの作品を皆で言い合う機会は全くなかったのでおもしろかったです。

・参加してよかったです。今後も機会があれば参加したい。

・もう少しみんなが積極的に発言されたらいいのになあとおもいました。

・誘導されている感じがしました。でも全く違う方達と1つの作品を話すことは新鮮でした。

・主人が認知症のため、包括支援センターの方にお説明を受け、絵が好きだった主人にとっても良い影響と思いました。今日の主人の変化が楽しみです。

愛知県豊橋市今橋町 3-1 (豊橋公園内)  
<https://toyohashi-bihaku.jp/>

担当学芸員／細田樹里



2024年3月18日(月)

アートリップ／10:30～11:30 参加者数／6名(当事者 4名)見学者(ご家族 4名、介護施設職員 2名、地域包括支援センター職員 1名、美術館関係者 3名)  
 講演会／14:00～15:00 参加者数／30名

アートリップでの鑑賞作品

「さらば！」アルフレッド・ギュ／1892年／油彩・カンヴァス／170×245cm

「逆風」ジャン=ジュリアン・ルモルダン／1905年頃／

油彩・カンヴァス／97×130cm

「ビグダンの祭り」モーリス・レオナール／20世紀／油彩・カンヴァス／

130.3×162cm

※所蔵は全てカンペール美術館(フランス)所蔵

アートリップ参加者アンケート

次回の参加希望は 100%

感想・ご意見

- ・自分の歩いた道を振りかえることができました。最高の幸せの人生でした。椅子に座って見ることができて良かった。
- ・楽しかった。
- ・絵をゆっくり見る事で様々な事が話せる。知らない人とも仲良くなれるし、自分の思いも言えるのでとても楽しい時間でした。
- ・参加時は、緊張していましたが、みんなで話をする度に言葉が増え、笑顔も多くなり、楽しむ事が出来たと思います。ありがとうございます。
- ・一人ひとり、それぞれの感性のちがい。
- ・熱心に説明していただき、今までとは異なる印象でした。

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

鳥取県倉吉市仲ノ町 3445-8  
<https://www1.city.kurayoshi.lg.jp/hakubutsu/>

担当学芸員／伊藤泉美

2024年3月23日(土)

アートリップ／10:00～12:00 参加者数／10名(ご家族 4名、介護施設職員 2名、地域包括支援センター職員 1名、美術館関係者 3名)  
 講演会／13:30～15:00 参加者数／30名

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

..

## 振り返り会／概要

美術館における認知症当事者を対象とした社会的处方アートプログラム

「アート × 美術館 × 認知症」

超高齢社会である現在の日本では、年を重ねても健やかに過ごすことは、私たちの誰もが願うことです。身近なそして誰にも関心の高い事柄である認知症。その当事者とご家族・介助の方々が対等に楽しめる美術館でのアートプログラムに長年取り組んでいる一般社団法人 ArtsAlive は、今年度、日本財団の豊かな文化での助成事業に採択され全国の美術館、博物館 10 館で、アートリップ実施と講演会を開催しました。そこで実際に実施された各美術館、博物館の学芸員の方々に、事業実施の前後の取り組みとその成果を発表いただき、それぞれの地域で広く継続可能となるように、情報共有と自由な意見交換を通して今後の課題の場として振り返り会を開催しました。

●日時：2024年3月30日(土)13:30～17:00

●タイムスケジュール

13:00 開場 受付開始  
13:30 プログラム開始 事業概要と感想 /一般社団法人 ArtsAlive 代表理事 林容子

13:40 実施館による取組みと成果報告

14:50 終了／一 休憩 — 10 分

15:00 意見交換／先進事例について

課題／継続について（予算・人材・アートコンダクター・募集方法）

17:00 終了

●場所：国立新美術館 研修室 AB（港区六本木 7 丁目 22-2）

●参加者

本年度実施館／担当学芸員

小樽芸術村 似鳥美術館／磯崎亜也子

三重県立美術館／道田美貴

川崎市岡本太郎美術館／佐藤玲子

栃木市立美術館／山口加奈子

秋田県立近代美術館／北島珠水

熊本市現代美術館／岩崎美千子

佐倉市立美術館／西川可奈子

丹波市立植野記念美術館／永山宗史（紙面発表）

豊橋市美術博物館／細田樹里

倉吉博物館／伊藤泉美

## 振り返り会／各館発表

10 館の実施館の担当学芸員から、取り組みや課題、感想などを発表。ほとんどの館での課題は、参加者募集と継続するための予算確保、また実施後、館内の認知症プログラムの認知度の向上とともに、継続実施への機運が高まったことが共通の成果となった。

●小樽芸術村 似鳥美術館／磯崎亜也子

●実施後の広がり

・アイン薬局小樽市立病院との共催で、福祉事業者、医療関係者を対象に夜間に体験会、講演を夜間に開催。28名（家族会の代表の方を含む）が参加、情報が届いて欲しい方々へ確実に届いたこと。

●実施しての課題

予算／人材（アートコンダクター）既に導入されている館があれば、導入の経緯と課題／参加者募集／交通アクセス

●アートリップで印象に残った作品

藤田嗣治の「カフェにて」が印象に残っています。人がものを見るときに、その人の経験や状況が反映されるのだということを改めて感じたからです。作中に描かれた女性は誰に手紙を書いているのか意見を出し合う過程で、「お母さん」と応えた男性。今は亡きお母さんに何か伝えたいことがあるのかもしれません。背景の店員の後ろ姿に注目して「僧帽筋がしっかりしている」と発した男性。じっさい筋トレをしている方でした。作品を媒介として、参加された方ひとりひとりと出会うことができるプログラムだと思います。



●三重県立美術館／道田美貴

●実施後の広がり

館内の職員で関わる第一歩／地域の関係団体との繋がり

美術館の協議会、専門委員会で事業内容等を説明

●実施しての課題

予算、人材（アートコンダクター）など継続のための先行事例の調査  
●アートリップで印象に残った作品  
文字のような黒く太い線が画面に広がり、その周辺に赤や青、黄色などの色が配されたミロの「女と鳥」。人気の作品でありながら、「何が描いてあるかわからない」「抽象画は難しい」と言われることの多い作品でもあります。鑑賞会で採り上げるには難易度が高すぎるのは、という我々の先入観はすぐに払拭されました。「おまつりみたいに音が聞こえる」「花火みたい」と、アートリップで盛り上がった気分そのままに、自由で楽しいものを連想してのコメントが印象にのこっています。そして丁寧に言葉が交わされた後、ミロが関心を持った日本の書に話が及びました。その影響を作品にみたときの参加者の驚きと感動の声も忘れられません。

●川崎市岡本太郎美術館／佐藤玲子

●実施後の広がり

他の職員がアートリップを見学、講演会を視聴し、継続したいという機運が高まった

●実施しての課題

人材（アートコンダクター）／参加者募集の方法／参加される当事者の方の事前情報収集について

### ◎アートリップで印象に残った作品

参加者の方の緊張がほぐれてきた3点目の作品「愛撫」が印象深かったです。横幅4mの大作で、どちらかというと抽象的で鑑賞が難しいと思っていた作品でしたが、作品を見る中で、自分に照らして生き方を振り返るような言葉がみられたり、「何かが起こってしまった後」の場面だというコメントにもはっとしました。椅子には座らず、大きい画面と向かい合って自然に言葉が出てくる様子が印象的でした。

### ●栃木市立美術館／山口加奈子

#### ◎実施後の広がり

- ・認知機能の程度による反応・認識などを学べたこと。
- ・介護者と当事者が対等に楽しめる良いプログラムと認識。
- ・認知症の方への認知機能活性化及び社会参加として有効と実感。

#### ◎実施しての課題

集客／認知症カフェなどで周知、出張実施／鑑賞作品の題材が重要と理解／地域との連携方法について

### ◎アートリップで印象に残った作品

最も印象に残ったのが鈴木賢二の「花」。前の2作品が写真ということもあり、ご自身の幼少期の姿と重ね合わせながら発言されている方が多かったですが、この作品になると、絵をじっくり見ながら自分が思ったこと、他の方とは違った意見もあったりするなど、対話が生まれていました。また、認知症当事者の方も絵を見た素直な感想を述べられるなど、絵を通していろいろと想像しながら見ている様子がうかがえ、鑑賞の時間の大切さを鑑みた気がします。

### ●秋田県立近代美術館／北島珠水

#### ◎実施後の広がり

- ・地域とのネットワーク作り（地元介護施設、認知症家族会等）
- ・来年度の取り組みの柱にしたい、自らで実施できる体制整備
- ・自治体職員（福祉関連、教育委員会、文化関連）との連携

#### ◎実施しての課題

人材（アートコンダクター）の他館での継続体制について事例が知りたい／アートコンダクターの養成について興味がある

### ◎アートリップで印象に残った作品

佐々木裕久「地の華—凍結した夜」が印象に残っています。

作品1、2はご自身の思い出など具体的な内容の言葉が多かったのですが3の作品に関して、「人生のようだ」「前向きな感じがする」など自分の内面を表現する言葉が多く聞かれたことがとても印象的でした。

普段の会話ではなかなか発することが少ない表現であったり、考えたり、感じたりする機会があまりないことのように思いました。

作品の選び方、鑑賞する順番や流れ、言葉の拾い方、つなげ方がとても大切であることを感じました。

### ●熊本市現代美術館／岩崎美千子

#### ◎実施後の広がり

地域高齢者支援センターへの通知の実現／地元紙にて記事を掲載

#### ◎実施しての課題

広報・募集方法／有効な方法は何か？

外出が難しい→アウトリーチ型のニーズ／「認知症の方」といワードをを前面に出すべきかの議論があった

### ◎アートリップで印象に残った作品

「花」坂本善三／1933（平成5年）

タイトルと併せて見ているとそれほど違和感なく「花」として認識するのですが、アートリップで絵だけ会話をしていくと、「人の顔」や「パフェ」という見方が出て驚きました。同僚も同じ感想を抱いたようです。それまであまり思っていませんでしたが、観者の想像が膨らみやすい作品であることに気づかされた次第です。アートリップでは3つ目の作品だったせいか、認知症当事者の方は疲れ気味になっていましたが、赤や黄色など目に付く色も多く、アートリップや高齢者との鑑賞会に向いている作品なのかなと思いました。

### ●佐倉市立美術館／西川可奈子

#### ◎実施後の広がり

- ・館内のプログラム認知度が向上

・講演会を聴講した市議会議員が後日来館、美術館事業の意義を他の議員にも周知、より良い活動実施のために議会での提案を約束。

#### ◎実施しての課題

予算の獲得方法（自治体の福祉課と連携など先行事例など）

人材について

### ◎アートリップで印象に残った作品

佐藤事「桜華雲—神楽に依る」1978（昭和53年）

アートリップ当日、当館で2作目に鑑賞した作品。目を凝らすと画面いっぱいに描かれた花の中に数匹のカエルを見つけることができる。

林氏から「カエルは何匹いますか」「この花はなんという種類の花でしょうか」「みなさん、カエルにまつわる思い出ってありますか」と問いかげられると、鑑賞者から発にコメントが飛び出した。特に鑑賞者が幼少期に触れたカエルとの思い出を、対話を通して言語化していく様子が印象的であった。

### ●丹波市立植野記念美術館／永山宗史

#### ◎実施後の広がり

参加者からのコメント「認知症へ美術鑑賞が与える効果について知れた」「今後も同様のプログラムを実施してほしい」「自分のこととして講演会をうかがえた」

#### ◎実施しての課題

イベントの周知／リニューアルオープン記念展とアートリップ実施を段階的に市長の定例会見に資料提供、アートリップのメディア取材

開催日・時間の設定／休館日か開館日 メリット／デメリット

### ◎アートリップで印象に残った作品

丹波地域の名産品である松茸が主題の山本茂斗蔵《松茸》でのアートリップが印象に残っています。林様には「地域の方の生活に結び付いた身近なもの、食欲を刺激する感覚にうたえかけるもの」として、最初に鑑賞する作品として選んでいただきまし

た。現在の丹波地域では、松茸よりも黒豆、丹波栗、大納言小豆が農作物の「丹波三宝」として有名ですが、かつて丹波は松茸の産地として知られていました。丹波市在住の70~80代の方は若いころに近所の山でたくさんの松茸を収穫して食べた経験がある方が多く、松茸を見て懐かしそうに思い出を話していました。参加者の皆様にとって松茸狩りや食事は楽しい思い出だったそうで、初対面のときの緊張感が一気にとけて、なごやかな雰囲気でお話しされていた様子が印象的でした。

#### ●豊橋市美術博物館／細田樹里

##### ◎実施後の広がり

・アートリップを見学した地域包括支援センター職員より「皆さんが楽しそうにされていて良かった、自分の職場でも実施できないか。」と打診があった。

・他館学芸員より「参加者が来館した際のおもてなし体制が素晴らしかった。同じ目線で話すなど、アートリップが盛り上がるための雰囲気づくりに大いに学んだ。」

##### ◎実施しての課題

トーカーが絵のテーマから離れていた時、どのように絵に立ち返るか。

##### ◎アートリップで印象に残った作品

一番印象に残ったのは、ジャン=ジュリアン・ルモルダンの「逆風」で、一見すると性別がわからない人物が複数名、海辺を歩いている作品。

70代の当事者男性が「風の強い大変な状況を描いているので、男性のような勇ましい顔をしている」という趣旨のコメントをされた。

この方は3点とも絵をよく見て的確なコメントをされた。聞いていて楽しく、新たな気づきを得た。アートリップ後の振り返りでも3点の持つ性質の違いを指摘され、一同で拍手をした。林先生がこの3点を選んだ意図を的確に理解されていた。それを聞くご家族の嬉しそうな表情も印象的であった。

#### ●倉吉博物館／伊藤泉美

##### ◎実施してよかったこと

・今年度決めていた認知症の方を対象とした臨床美術のワークショップ開催から、元ケアマネージャーの事務系職員の「より対象を広げ、どんどんすれば良い」との助言でプログラムを実施、館内での知見を広げることができたこと。

・認知症の人と家族の会の鳥取支部の代表の方々へプログラムの理解を深めてもらつたこと。

・長寿社会課との協力で、参加者募集、当日の送迎を担当していただき、今後も開催を希望。

・展示監視員の方もアートリップの様子を見て、椅子の片付けをしてくださり、館内でのプログラムの認知度が高まったこと。

・館長による館内での継続実施の機運の高まり。

##### ◎実施しての課題

##### 予算・入材（アートコンダクター）

##### ◎アートリップで印象に残った作品

一番印象に残っている作品は「椿林」橋本花。

精緻に描いた作品などが注目される展示室で注目されることの少ないこの作品のスケール感や色彩、生き生きとした描写をじっくりと鑑賞することができたから。展示室にいた展示監視員も、「作品に対する印象ががらりと変わった」と話していました。

## 振り返り会／意見交換



振り返り会の事前アンケートにより、現在、継続的にアートリップを実施している他館への関心が高かったため、2018(平成30)年度よりアートリップを定期的に開催している山梨県立美術館の事例を紹介。

##### ●山梨県立美術館とアートリップの関わり

##### ◎初年度／2018(平成30)年度

山梨県立美術館40周年事業の一つとして初めて実施／教育普及担当者が他美術館で「アートリップ」を体験し、感銘を受けたため。

##### ◎次年度／2019(令和元)年度～2026(令和6)年度まで継続予定

・現在、アートリップ開催は年3回。来年度は2回の予定。  
・文化庁の補助金「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化推進事業」の一つとして実施。

→対話型鑑賞が一つの柱／多様な人々（子ども、大人、障がい者、観光客など）を対象としたオリジナルの対話型鑑賞プログラムの構築を推進。

→アートリップは、高齢者や認知症当事者とご家族といった人々に美術館との接点をもたらし、また参加者への効果が当館の目指す対話型鑑賞の在り方と以下の点で合致。

- ①「多様な」の中の認知症当事者とその家族等に鑑賞サービスを提供できること
- ②認知症の予防・進行を緩やかにする効果のあるアートリップはwell-beingを実感できる鑑賞になり得る可能性が高いこと

##### ◎地域の認定アートコンダクターとの関わり

##### ・アートリップ実施を担当

→認定アートコンダクターによるファシリテーション方法も当館独自の対話型鑑賞メソッドを作り上げるのに大変参考になった。

→アートコンダクターの謝金は、現在、国費（県も一部負担）、令和7年度以降を県費で賄えるか検討中。

##### ◎集客が課題

アートリップを一度体験すれば、その魅力を実感してもらえるのだが、

→美術館に認知症当事者あるいは高齢者を連れ出すことはなかなか難しい。

→美術館や作品鑑賞に対する「難しい」「ハードルが高い」といったイメージや、鑑賞プログラムそのものに対するイメージがわからることも一因か。

##### ◎継続していることへの効果・影響

##### ・新聞、テレビ局の取材を受けるようになった。

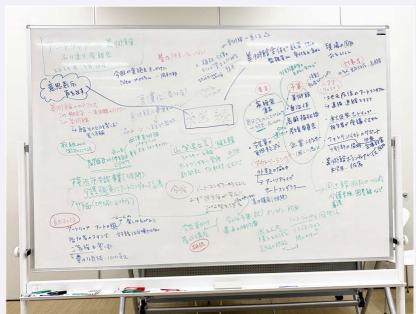
→アートリップのような鑑賞方法があること、またそれを展示室で行っていることを知つもらう機会は増えた。

・多くの参加者を募るために、令和5年度からは認知症の方に限らない高齢者（65歳以上）も対象とする。

##### ◎継続実施の館内外の評価について

・参加者へのアンケートでは、90%を越える割合でプログラム内容を「満足」と評価（5段階評価、4以上の割合）。

・山梨県立美術館でのアートリップについての報道では「新しい鑑賞」「ちょっと変わった（おもしろい）鑑賞」と好意的に報じられた。



### ◎今年度の実施館から課題についての意見交換

- ◎次年度の継続について／「ゆるやかに」実施を検討。より多様な対象への連携などの調査と先進事例を調査予定。既存の事業の枠組みで実施。
- ◎予算について／アートコンダクターの謝金をどう調整するか。既存の事業の一部をして実施。
- ◎今後の継続について／
  - ・館長の継続決定があれば、継続可能。
  - ・有償化での継続は東京では可能であるが、地方の公立館では有償化は困難。

### ◎アートリップの実施継続について

- ①参加者自己負担型（アーツアライブ主催・国立西洋美術館 2012年～2020年）
  - ・初年度は経産省の補助金事業／入場料減免・参加者8名＋アートコンダクターの9名 アートコンダクターと他のスタッフ謝金はアーツアライブが負担
  - ・次年度以降 都内美術館にて参加者から参加費徴収／入場料減免・参加者＋アーティスト、スタッフ
  - ・認定アートコンダクターが実施
  - ・参加者募集から当日運営までアーツアライブ担当、美術館は協力（美術館に事業報告書と収支計算書を毎年提出、美術館年報に協力イベントとして掲載）

### ②美術館主催型

- ・美術館が助成金などで実施（山梨県立美術館他）  
→地域の認定アートコンダクターが実施  
→認定アートコンダクター謝金は助成金より

### ③今後の可能性として

- ・費用支援先（予算・寄付など）として／地域企業・商工会議所・教育委員会・自治体の高齢者福祉課・ロータリークラブ・ライオンズクラブ等
- ・地域の認定アートコンダクターの活用

### ◎募集方法について／

- ・情報が届いて欲しい方へなかなかリーチできない、より効果的な方法があるのか。  
→行政の高齢課、福祉課、地域包括支援センター、認知症の人と家族の会、地域の支援団体、オレンジカフェなどへの定期的なアプローチが必須
- ・前年度参加された方が入院されるなど、参加者の体調面での厳しさ。
- ・交通移動手段／高齢者施設の方の移動手段と介護者などの問題。  
→高齢課との連携（施設から美術館への送迎と介護）

### ◎認知症の表記について／

- ・まだ認知症ではない高齢者の方は、認知症と表記することで抵抗感・拒否感があるので「ご高齢の方のための脳活」などの表現で、認知症予防として関心が高まるのではないか。
- ・認知症と表記した場合、家族への参加を促す効果がある「認知症でも美術館に行ける」。

### ◎学芸員のアートコンダクター養成講座受講について／

- ・学芸員が受講する場合、館から交通費のみ支給の可能性あり。但し、受講料は個人

負担のため、初級講座（2日間／63,800円）までは何とか負担できても、中級講座（4日間／220,000円）は厳しい。

→何らかの補助金、助成金が必要。

→国の事業での子どもの鑑賞プログラム研修事業（3日間集中／全国の学芸員、教員などが対象）のようなものがあれば受講しやすくなり、より広く早く普及する可能ではないか（子どもの鑑賞プログラムが全国にこれだけ普及したことが証左）。

→対象を美大生や、福祉、医療関係の学生にもすることも可能ではないか。

### ◎アートコンダクターについて（アーツアライブ）

- アートコンダクター養成講座を受講した方／認定アートコンダクター／アーツアライブ正会員
  - ・認定アートコンダクターは、養成講座の初級・中級講座を受講後、認定試験に合格した方
  - ・アーツアライブ正会員は毎月2回の練習会に参加可能

### ◎アートコンダクターについての今後の検討事項

- ・誰がアートコンダクターをするか
- ・アートコンダクター養成講座の初級講座を受講した学芸員
- 初級＋作品選定、テーマ設定、順番などのノウハウなどの要素が必要

・アートコンダクター養成講座の初級・中級を受講し認定を受けた美術館解説ボランティア→ボランティアでも毎回異なる人が担当するのは問題（経験が重要）

・ことばの問題／現在使用している「認知症当事者」の「当事者」を、高齢課では使わないとのことで、今回は、「認知症の方」と表記。当事者は、本人と家族を指す。

### ◎介護と介助について／

- ・医療では介助の方が広い概念。「介護」は、介助と看護を混ぜ合わせたことばで、する方ではなく、される側で使い分けされている。介助より介護の方が、生活力が落ちている高齢者（時に障害者）に対して使う。
- ・介護者、介助者を使わない。

### ◎アートリップの効果検証について

- ・2013年 独立行政法人長寿医療研究センター／脳賦活部自立支援室（島田裕彦）  
MCI 且つうつ状態のある（スケール5以上）在宅高齢者のうつの軽減と精神状態の向上や認知力の向上兆候など認知症予効果の兆候が認められ認知症予防効果を検証。
- ・2021年 仙台仙台富沢病院／理事長 藤井昌彦  
長期認知症患者対象に仮設ギャラリー内の複製画を使っての対話型鑑賞アートリップを4回実施。同病院考案の情動指数により BPSD 軽減効果を測定。
- ・2019年 国際治験「A-Health」に参画、査読学術誌'Frontiers in Medicine'に掲載（2023.7）  
Dr. Bouchet（マギル大学、カナダ）のプロトコルによる美術館における参加型アートプログラム（創作とアートリップ）が在宅高齢者の心身の健康、QOL、ウェルビングに与える効果を検証。協力：東京富士美術館

今回の全国の10館で開催されたアートリップを見学された方や、それに続く講演会に参加された方々から様々な感想、ご意見をいただきました。

- ・アートリップというものを初めて知り、今後の社会にとても必要な取組を感じました。
  - ・認知症の方だけではなく、一般市民や精神的な病を患っている方にも体験してほしい。
  - ・講演後、早速認知症の母に、好きだった日本画（小倉遊亀）を見せましたが、これは誰？に固守してしまって鑑賞する事は出来ませんでした。次回はパウルクレーの色鮮やかな抽象画を見せるつもりです。母がどんな絵に興味を持つのか、会うのが楽しみになっています。
  - ・認知症とアートの関係について学ぶことが出来ました。全く新しい認識を得ることができ、大変感動しています。「薬」「リハビリ」ではなく、楽しむことの大切さ。
  - ・当事者同士で会話がはずむのが良いと思いました。また、家族や見学者も癒やされるのが良いと思いました。
  - ・私共認知症当事者が講演会に参加するとは勿体ない、行政の福祉担当者に是非参加してMCI当事者を食い止めて欲しい。
  - ・私の家族も認知症です。もう高齢なのであきらめしていましたが、認知症でも感情は残ることを知り、楽しい思いをさせてやりたいと思いました。アートを見て美しいと感じてくれたら嬉しいです。
  - ・参加された方々が、自分の思いや考えを言葉で話すこと、聞くこと、応じることに嬉しくなりました。絵画にはそんな力があるのですね、もちろん、アートコンダクターの力も大きいのだろうが、見ていて楽しかったです。
  - ・認知症の方だけでなく、すべての方を対象としたアートリップが定期的に行われていると、居場所と感じ地域などに定着していくと思います。
  - ・目からウロコぐらいの感動でした。認知症の方がイキイキと発言されている、ほほえましく、あたたかい気持ちになりました。そして、希望も持りました。
  - ・アートリップで認知症の方の切っていた回路を繋ぐ→自信→尊厳→喜びへ。素晴らしいと思いました。
  - ・介護している家族へアートリップの対話方法を伝えていきたい。
  - ・高齢者の方々のレクリエーションに取り入れたり、自分たちの仕事、家族であれば「介護」に楽しみや、余裕が持てると思いました。
  - ・認知症高齢者の方が利用するデイサービスのレクレーションに取り入れたら、介護するスタッフさんにも、認知症の方にも、もっと興味がもてると思います。
  - ・介護スタッフがアートリップを学ぶ機会があればよいと思います、グループホームや介護施設職員、ご家族を対象に研修会を行なってほしいと思いました。
  - ・福祉だけではなく、まちづくりなど、いろんな分野で活かせると思いました。
  - ・美術館で開催するという企画が、外出して人との交流が持てるので、それだけでも十分意味のあることだと思います。
  - ・一般市民として受講させていただきましたが、とても感銘しました。認知症＝マイナスのイメージだったのが、希望の光が見えました。特にビデオで病院内の美術館で患者さん達が楽しそうにお話されてるのを拝見し、勝手に認知症のイメージがありましたが払拭されました。介護する側、介護される側、ご家族みんなが笑顔になれる素晴らしいプログラムだと思います。三重県でも広まってほしいです。いや、全国で広がれば、施設での虐待等少なくなるんではないかと思います。人材育成、財政等課題

が、多いかと思います。国は、こういったことに積極的に支援してほしいと切に願います。

- ・こちらも認知症当事者を対象としたアートプログラムに実際に参加していないのはっきりとお答えできませんが、絵画を認知症当事者に見せて対話をするといった療法（プログラム）の他に、現実として多くの高齢者（認知症を患う人も含む）や身体・精神障害を持つ方々が過ごす施設や病院を運営する方々（経営者）や職員の方々のマインドセットをアートという媒体を使って養っていく、“普通”であることの縛りから解放するという試みが必要ではないかと思いました。 また、こと日本においては「学術的な資格を持っている」ことがとても重要視される感があり、養成された限られた人しかできないプログラムではなく、人生を通して実体験や仕事をとおして知識を得た方々がどんどんコミュニティベースで自発的にやっていくことが望まれるのでは、とも思いました。

・認知症の方々への鑑賞プログラムや回想法などの事業展開は「できないことが増えていくため、それを予防する」「非薬物療法の一種」とのみとらえていたが、逆に

「認知症の集中力や好き、嫌いという感情をプラスにとらえ、受け止める」という視点が興味深かった。また、心身の状態で美術館に足を運べない方々もオンラインや施設で観賞をおこない、表情が変わっていく部分が興味深かった。

・誰もが認知症になりたくないと思うのは当然のことかもしれないが、「認知症になる=よくないこと」というような風潮を、もっとやさしい社会に変えていければいいと改めて考えさせられました。アートを楽しむことで自分らしくいられる、人間の尊厳が保たれる、ということに救われる思いです。映像の、緊張したこわばったお顔からイキイキとした表情に変わっていました場面には感動しました。人とコミュニケーションをとり、ありのままでいられ、「楽しい」と感じることの大切さがよくわかりました。研究成果はとても興味深く、アートっていうこんな楽しみ方があっていいんだということにも気づけ、ワクワクしました。

・MCI当事者の方から後日いただいたメッセージ

薬物での効果には限界のある両方に非薬物「アートリップは、楽しく効果は、行政もアートコンダクターの育成を期待しています。このようなプログラムを参議員事務所に情報提供に行くつもりです。再び開催せ手たら美術館の担当学芸員の方から、家族会に連絡があるのを楽しみにしております。

### ●継続について

- ・継続して参加頂けてこそ効果を感じるプログラムだと思うので、単発で終わらせないことが重要なのだと思います。
- ・最初は参加者がないかもしれないが、何回もやる、工夫を重ねてゆくことで広がるのではないか。
- ・アートリップは認知されているのか？大企業は何億もの資産を所有すれど、トップリーダーはアートリップの認識があるのだろうか？行政職リーダーも同様。トップが理解しないと普及しない。職場でのストレス、若者の引きこもり等に実践出来ないか？美術館に行かなくてもレプリカ、オンラインで出来るのであれば、職場の管理職や家族が出来る。
- ・認知度をあげること。知らないと参加させたくても参加出来ない。
- ・アートコンダクターを各地で育てるための予算。定期的に開催する予算が必要。
- ・地域の福祉関係者との連携が必要となるのでは（コミュニティを取り入れる）。

### ●アートコンダクターについて

- ・参加者が素直に話しやすい開かれた場を作る、アートコンダクターのコミュニケーション力はどう磨いていくのか、講座を受けてみたいと思いました。
- ・作品選択が一つの鍵になると感じた。加えて、トーク者が美術館スタッフ以外の場合、作品について美術館と事前に議論し、大体のコンセンサスを得た上でトークに臨むのが理想的と感じる。作品研究がある程度されていれば、参加者の自由な発想に基づく発話も受け止めつつ、作品の本質的な部分からそれずに適度にコントロールできると思う。それることが問題だとは思っていませんが。
- ・アートコンダクターとして稼働できる日が限られるので、恐らく兼業をされていると思います。不安定な雇用とならざるを得ず、雇用する側（美術館）としては心苦しく思います。

3月30日、東京の国立新美術館の研修室に今回アートリップを実施した美術館の担当学芸員10名（内一人は書面による参加）が振り返り会の為に集まりました。各人の報告と課題のディスカッションを通して、実施後様々な動きがあることがわかりました。見学された教育委員会の方の提案で地域ぐるみで次年度より広範囲での実施を計画している美術館、市議会議員が議会で美術館の新しい活動として議題に出した美術館、アクセス改善の為に高齢者施設に迎えのバスを出すことを検討されている美術館、4社のマスコミの取材を実現させプログラムの認知を高めた美術館、今回参加された方を対象に今年も小規模ながらプログラム実施を検討しているなどなど、10館全ての学芸員が認知症と家族の為のプログラムを今回で終わらせてはいけない、何とか小さな規模でも継続させようという意気込みを感じることができました。また、担当学芸員全員がアートリップのスキルを学ぶ講座を受けたい、公費で開催して欲しいとの要望も聞かれました。それはアートリップの参加者の楽しそうな様子に感動し、意義を感じてくださったからだと思います。日本の美術館の在り方の大きな変化の始まりを感じました。全ての大きな変化は人一人の小さな決意から始まるからです。

博物館法が改正され、国際定義においても美術館は社会包摂の施設と定義されました。地域には沢山の認知症の方とその何倍ものご家族がいらっしゃいます。その方たちにとってこれまでの美術館はあまり関係のない場所だったかもしれません。でも、《アートリップ：アートの旅》を実施すれば彼らがまた来たい、かけ変えのない場所になります。もっともっと多くの美術館が認知症を含む高齢者が家族と楽しめるアートの旅

を実施するようになることを願ってやみません。そしていつの日か社会的処方として  
だれもがどこの美術館でも体験できるものになる日まで、私たちは、美術館とともに、  
微力ながらできる限りの努力を続けてまいります、最後に本事業にかかわってくだ

さった全ての方に厚く御礼申し上げます

## 作品一覧

- P09  
 作品 01 《アレクサンドリアの聖カタリナ》  
 ムリーリョ、バルトロメ・エステバン  
 油彩・カンヴァス／三重県立美術館所蔵

P10  
 作品 02 《森の捷》岡本太郎  
 1950(昭和 25)年／油彩・カンヴァス  
 181.2×259.0cm  
 川崎市岡本太郎美術館所蔵

P10  
 作品 03 《マラソン》岡本太郎  
 1964(昭和 39)年／油彩・カンヴァス  
 164.0×227.31cm  
 川崎市岡本太郎美術館所蔵

P10  
 作品 04 《愛撫》岡本太郎  
 1964(昭和 39)年／油彩・カンヴァス  
 227.0×417.3cm  
 川崎市岡本太郎美術館所蔵

P11  
 作品 05 《花》鈴木賢二  
 1961(昭和 36)年頃／93.5×102.5  
 木版／栃木市立美術館所蔵

P13  
 作品 06 《夏みかん》石田澄男  
 2007(平成 19)年／油彩・キャンヴァス  
 45.5×53.0cm／熊本市現代美術館所蔵

P13  
 作品 07 《楽しい生活》淵田安子  
 2000(平成 12)年  
 油彩・パネル・キャンヴァス  
 130.3×162.1cm／熊本市現代美術館所蔵

P13  
 作品 08 《花》坂本善三  
 1933(平成 5)年／油彩・キャンヴァス  
 91.0×72.8cm／熊本市現代美術館所蔵

P15  
 作品 09 《松茸》山本茂斗萌  
 制作年不詳／紙本着色／36.0×31.2cm  
 三友楼所蔵

P15  
 作品 10 《鷹図》常岡文亀  
 制作年不詳／絹本着色／50.5×124.0cm  
 丹波市立植野記念美術館所蔵

P15  
 作品 11 《春の海 一の谷から淡路を望む》  
 川端謹次／1972(昭和 47)年  
 油彩・カンヴァス／111.5×145.0cm  
 三友楼所蔵

P16  
 作品 12 《さらば！》アルフレッド・ギュ  
 1892年／油彩・カンヴァス／170×245cm  
 カンペール美術館(フランス)所蔵

謝辞

ご協力いただいた  
皆様に心より感謝申し上げます。

#### 本事業でのアートリップ・講演会実施館（実施順）

小樽藝術村 似鳥美術館（北海道）

三重県立美術館（三重県）

川崎市岡本太郎美術館（神奈）

栃木市立美術館（栃木県）

秋田県立近代美術館（秋田）

熊本市現代美術館（熊本県）

佐倉市立美術館（千葉県）

丹波市立植野記念美術館（兵庫県）

豊橋市美術博物館（愛知県）

## 食吉博物館（鳥取県）

治世行持篇（卷之六）

### 謝辞（画像提供）

岡本太郎記念現代芸術振興財団

企画・制作／一般社団法人 Arts Alive

監修／林 容子

冊子構成・編集／黒田みのり

デザイン／横川知宏・玉井一平

イラスト／石田秀樹 (P02-03)

発行／一般社団法人 Arts Alive

170-0003 東京都駒込 2-5-1-903

TEL 03-6731-1673

助成 / 日本財團 (事業 ID : 2023017379)

助成／日本財團（事業ID：20230173777）

## 美術館における認知症当事者を対象とした 社会的知覚アートプログラムの開催

## 社会的処方アートプロジェクトの開催

発行日／2024年3月

©2024 Arts Alive

Supported by  日本  
財團 THE NIPPON  
FOUNDATION

# 美術館の展示物を語る その構成と解釈

2023(令和5)年1月28日 本題題美術賞受賞  
書吉賀

# 「美術×映画」展 for people with dementia and family members at art museums

THE NIPPON FOUNDATION 5053  
Society of Social Psychiatry supported by  
Ministry of Welfare, Japan

in Japan as a means of Social Prescription

۸۱۹

解説／会員登録

ε0°

二〇〇九

九一九—九二

20-40°

P25-P27

09-08

## 歴史の式式ホチ咲き会寅萬

七八—七八